

学位論文審査の要旨

学位申請者	Guillemot Oriane Claire Alice 比較社会文化学専攻2020年度生	論文題目	『うつほ物語』研究—〈笑い〉を中心に—	
審査委員	主査:	松岡 智之 准教授	インターネット公表	学位論文の全文公表の可否 : 否
	副査:	浅田 徹 教授		「否」の場合の理由
	副査:	田中 琢三 准教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	和田 英信 教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	加藤 夢三 助教		<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博士 (人文科学)			<input type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
(英語名)	(Ph. D. in Japanese literature)			<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について

学位論文審査・内容の要旨

ギュモ・オリアンヌ氏の博士学位請求論文『『うつほ物語』研究—〈笑い〉を中心に—』は、第一章～第四章の四章に、序章、終章などを付して成る。序章では、平安文学の〈笑い〉と『うつほ物語』の祝祭論とを中心に、関連する研究史を整理した。第一章では、ミハイル・バフチンのカーニバル論の応用に関して、2000年代以降のバフチン研究の成果もふまえ、〈笑い〉と両面価値性との重要性を論じた。第二章は、『うつほ物語』「藤原の君」巻を中心とする、上野の宮の挿話を分析した。〈笑い〉と両面価値性とを挿話全体に見出し、法会場面について祝祭における暴力と音楽との組み合わせを指摘し、祝祭性の理解を従来の研究以上に深めた。第三章は、吝嗇家の作中人物三春高基の挿話を扱う。作者の主張ともおぼしき社会批判を、作中で笑われる人物が語ることを、散文文学における多声性として把握した。第四章は、苦学生 of 作中人物藤原季英の物語を扱う。藤英を笑う作中の人々が批判の対象となり、それによって社会批判を形成することを論じた。第三章と第四章との組み合わせにより、『うつほ物語』が形成・表現する社会批判の方法的多様性を別括した。終章において、〈笑い〉に関する諸要素が、物語文学の多様性・複雑性をもたらし、物語文学の発達に寄与したことをもってまとめとした。

第1回審査会では、提出時にあった第五章を削除して論点を明確化するべきこと、文意不明瞭ないし日本語表現の不十分な点の改めるべきことなどの修訂意見が示された。第2回審査会では、求められた修訂がなされていることが確認された。